

「種蒔きのたとえ」

マルコの福音書 4:1～20

はじめに

今日からマルコの福音書 4 章に入ります。ここにはイエシュアが話されたいくつかのたとえ話が記されています。今日はそのうちの一つである「種蒔きのたとえ」と呼ばれるものについて述べたいと思いますが、イエシュアはこのたとえ話を、「湖のほとりで舟に乗って話された」ことが、まず初めに記されています。いつも述べているように、イエシュアについての状況説明、その言動にはすべて意味があります。そしてそれは必ずと言っていいほどに、神のご計画とその完成である「神の国」についてのものであり、そこでイエシュアが語られ、指し示されるその内容と密接に結びついています。では早速見てまいりましょう。

【新改訳 2017】 マルコの福音書

4:1 イエスは、再び湖のほとりで教え始められた。非常に多くの群衆がみもとに集まったので、イエスは湖で、舟に乗って腰を下ろされた。群衆はみな、湖の近くの陸地にいた。

4:2 イエスは、多くのことをたとえによって教えられた。その教えの中でこう言われた。

「湖のほとり」これはすなわち水と陸の境、分かれ目です。ヘブル語で「湖、海」のことをヤーム(𐤀𐤓)と言いますが、この最初の言及が創世記 1:10 にあります。

【新改訳 2017】 創世記

1:9 神は仰せられた。「天の下の水は一つの所に集まれ。乾いた所が現れよ。」すると、そのようになった。

1:10 神は乾いた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれを良しと見られた。

これは神の天地創造の御業の第三日を記した箇所です。「水の集まった所を海と名づけられた。」ここに聖書で最初のヤームが記されています。このようにヤームとは本来、神によって「天の下の…一つの所に集ま」ることを指し示していると考えられます。イエシュアはこの箇所を指し示して「湖のほとり」に來られたのだと考えられます。なぜならこの第三日は、以下のように続くからです。

1:11 神は仰せられた。「地は植物を、種のできる草や、種の入った実を結ぶ果樹を、種類ごとに地の上に芽生えさせよ。」すると、そのようになった。

1:12 地は植物を、すなわち、種のできる草を種類ごとに、また種の入った実を結ぶ木を種類ごとに生じさせた。神はそれを良しと見られた。

1:13 夕があり、朝があった。第三日。

これはヘブル語で「種」を意味するゼラ(זֵרָא)が聖書で最初に使われた箇所でもあります。イエシュアはここでこれからこのゼラを用いたたとえを話そうとしておられるので、この記述を指し示して、あえてこの場所を選ばれ、このような状況を設定されたのだと考えられます。

またイエシュアは「舟に乗って腰を下ろされ」て話されたとあります。「舟」はオニツヤー(אֲנִיָּא)で最初の言及は創世記 49:13 です。

【新改訳 2017】 創世記

49:13 ゼブルンは海辺に、船の着く岸辺に住む。

これはヤコブすなわちイスラエルがその息子である「ゼブルン」を祝福して語ったものですが、ゼブルンという名には「尊ぶ、あがめられて住む」という意味があり（創世記 30:20）、オニツヤーは本来「住む」こと、しかも尊ばれ、あがめられて住むことを指し示していると考えられ、イエシュアが舟に乗られたというこの行為には、イエシュアが王となる国、メシア王国としての「神の国」が表されていると考えられます。また先ほど「湖」ヤームには本来、神によって「天の下の…一つの所に集ま」ることが指し示されていると述べました。ですからイエシュアが湖に来られ、舟に乗られたというこの行動には、**王なるイエシュアによって集められた者たちの国としての「神の国」がこの地上に建てられること**が「型」として表されていると考えられます。そのように考えるならば、ここでこれから語られるイエシュアのたとえ話もまた、この事実に関連するものであると捉えなければなりません。ちなみにこの「たとえ」を語ることをヘブル語でマーシャル(מַשָּׁל)と言いますが、この動詞は本来、創世記 1:18 にその由来を持ち「司る、支配する、統治する」という意味を持っており、イエシュアが「**多くのことをたとえによって教えられた。**」その理由は、私たちが通常使うような、語る内容を解りやすくするためにもまたその逆でもなく、**支配者、統治者として、王の権威を持って語っておられた**ということであると考えられます。これはヘブル語でなければ絶対に知り得ない事実です。さて、それではこれらの事実を踏まえた上で、本題の「種蒔きのたとえ」の内容に入ってまいりましょう。

【新改訳 2017】 マルコの福音書

- 4:3 「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出かけた。
4:4 蒔いていると、ある種が道端に落ちた。すると、鳥が来て食べてしまった。
4:5 また、別の種は土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったのですぐに芽を出したが、
4:6 日が昇るとしおれ、根がつかずに枯れてしまった。
4:7 また、別の種は茨の中に落ちた。すると、茨が伸びてふさいでしまったので、実を結ばなかった。
4:8 また、別の種は良い地に落ちた。すると芽生え、育って実を結び、三十倍、六十倍、百倍になった。」

この「種蒔きのたとえ」は、イエシュアが話されたたとえの中では珍しく、イエシュアご自身による解き明かし、すなわちこのたとえがどういう意味であるかが、イエシュアご自身によって丁寧に説明されています。それが以下の記述です。

【新改訳 2017】マルコの福音書

4:14 種蒔く人は、みことばを蒔くのです。

4:15 道端に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばが蒔かれて彼らが聞くと、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを取り去ります。

4:16 岩地に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れませんが、

4:17 自分の中に根がなく、しばらく続くだけです。後で、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。

4:18 もう一つの、茨の中に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたのに、

4:19 この世の思い煩いや、富の惑わし、そのほかいろいろな欲望が入り込んでみことばをふさぐので、実を結ぶことができません。

4:20 良い地に蒔かれたものとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちのことです。」

このようにイエシュアご自身による解き明かしが記されているのですから、たとえ目を留めるよりも直接この解き明かし自体に目を留め、これを読み取る方が良いと考えます。では順番に見てまいりましょう。

1. みことば

まず「4:14 種蒔く人は、みことばを蒔くのです。」とあります。つまり「種」は神の「みことば」であり、「種蒔く人」とはもちろん神のことを指していると言えます。先ほど「種」はヘブル語でゼラと言ひ、天地創造の第三日にその最初の言及があると述べました。ですからゼラには本来、**その種類に従って増える、繁栄すること**が指し示されていると考えられます。しかし一方「みことば」を意味するダーヴァール(דָּבָר)は、これとは逆に、その最初の言及である創世記 11:1 から本来「一つ」という意味が指し示されています。

【新改訳 2017】創世記

11:1 さて、全地は一つの話しことば、一つの共通のことばであった。

このように「種」と「みことば」は全く対照的な意味を指し示した言葉ですが、まさに植物の種のように、初めは一つであったが、そこから増殖する様子が示されていると考えるならば不思議なことではありません。実際に、上記の箇所はバベルの塔の物語の冒頭の言葉ですが、神のようになろうとしたバベルの民の企てをやめさせるために、神はそれまで「一つの話しことば、一つの共通のことば」であった彼らの言語を増やし、人々を地の全面に散らされました。ですから「種」また「みことば」とは、**私たち人類**を指すと考えられます。なぜなら人はアダムという一人の人から始まり、その息子、娘たちから増え広がったからです。ちなみに「種」を意味するヘブル語のゼラには「子孫」という意味もあるので

す。ですから「4:3 …種を蒔く人が種蒔きに出かけた。」というたとえからの「4:14 種蒔く人は、みことばを蒔くのです。」という解き明かしには、

【新改訳 2017】創世記

1:27 神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。

1:28 神は彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。増えよ。地に満ちよ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地の上を這うすべての生き物を支配せよ。」

という出来事が指し示されていると考えられます。

2. 道端

次に「4:15 道端に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばが蒔かれて彼らが聞くと、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを取り去ります。」という解き明かしについて。「道端（道）」という意味のヘブル語デレク(דֶּרֶךְ)は本来、エデンの園にあったいのちの木への道を指します。

【新改訳 2017】創世記

3:24 こうして神は人を追放し、いのちの木への道を守るために、ケルビムと、輪を描いて回る炎の剣をエデンの園の東に置かれた。

これは最初の人であるアダムが、サタンの偽りによって罪を犯し、エデンの園から追放された場面です。人はこの「道」からも離されました。ですから「4:4 ある種が道端に落ちた。すると、鳥が来て食べてしまった。」というたとえには、この出来事が指し示されていると考えられます。

3. 岩地

そして「4:16 岩地に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れますが、4:17 自分の中に根がなく、しばらく続くだけです。後で、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。」について。「岩地（岩）」セラ(סֵלַע)は本来、荒野で神がモーセに命じて水を湧き出させた岩を指します。

【新改訳 2017】民数記

20:8 「杖を取れ。あなたとあなたの兄弟アロンは、会衆を集めよ。あなたがたが彼らの目の前で岩に命じれば、岩は水を出す。彼らのために岩から水を出して、会衆とその家畜に飲ませよ。」

モーセは神の命に背いてこの岩を打って水を出しました。イスラエルの民が荒野で生きるための飲み水を与えるために打たれた岩、これは生ける水、永遠のいのちへの水を与える（ヨハネ 4:14）と言われた

イエシュアを指すと考えられます。イエシュアが初臨によってイスラエルに來られた時、そのしるしと奇蹟によって多くの者が信じましたが、**イエシュアが十字架にかかれる時**には、みな離れてしまい、その弟子たちまでもがつかずき、去って行きました。それが「**4:5 土が深くなかったのですぐに芽を出したが、4:6 日が昇るとしおれ、根づかずに枯れてしまった。**」というたとえに表された出来事であると考えられます。

4. 茨^{いばら}

また「**4:18 もう一つの、茨の中に蒔かれたものとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたのに、4:19 この世の思い煩いや、富の惑わし、そのほかいろいろな欲望が入り込んでみことばをふさぐので、実を結ぶことができません。**」という解き明かしについて。「茨」はコーツ(קוצ)と言ひ、本来これは人の罪の結果生まれた植物として、大地の呪いを指しています。

【新改訳 2017】創世記

3:17 また、人に言われた。「あなたが妻の聲に聞き従ひ、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。

3:18 大地は、あなたに対して茨とあざみを生えさせ、あなたは野の草を食べる。

後述します「**良い地**」を神の国の完成と捉え、その関連性からこの「**茨の中**」は、罪の結果としての苦痛と嘆きに満ちた**今のこの世界、やがて滅びゆく今のこの時代**を指すと考えられます。

5. 良い地

そして「**4:20 良い地に蒔かれたものとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちのことです。**」とは、この地上に完成される「神の国」を表すと考えられます。なぜなら神はアブラハムを選び出し、彼のゼラ「種、子孫」を地のちりのように増やす(創世記 13:16)と約束されたからです。よってこの「**三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たち**」とは、「**良い地**」である「**神の国**」に置かれる**イスラエルの民およびそれに繋がる異邦人**を指すと考えられます。

| 道端 | 岩地 | 茨 | 良い地 |
|-------------------|---------------------|---------------|----------------------------|
| いのちの木への道 エデンの園 | 生ける水が湧き出る岩 イエシュア | 罪の のろい | イスラエルとそれに繋がる 異邦人の繁栄 |
| サタンによる人の罪 | イエシュアと十字架 | 滅びゆく今の世 | 神の国の成就 |

このように、イエシュアが語られた「種蒔きのたとえ」は聖書の物語全体、天地創造からエデンの園における人の墮落とそれに対する神の救済措置、そして地上における「神の国」の完成という神のご計画全体を表したものであると捉えることができるのです。そしてこのたとえはイエシュアを通して語ら

れました。それはこのご計画がイエシュアによって成し遂げられることを指し示していると考えられます。もしこのように解釈するならば、このたとえは人の弱さや信仰のなさを責めるものではなく、また努力して成長しなさいという教訓的なメッセージでもなく、神のご計画が表された、イスラエルの民とそれにつながる異邦人にとって良い知らせ、福音となり、その完成、成就を待ち望ませるようになるのです。

6. 奥義

またイエシュアのこのたとえについて、以下のようにも記されています。

【新改訳 2017】マルコの福音書

4:9 そしてイエスは言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい。」

4:10 さて、イエスだけになったとき、イエスの周りにいた人たちが、十二人とともに、これらのたとえのことを尋ねた。

4:11 そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の奥義が与えられていますが、外の人たちには、すべてがたとえで語られるのです。」

4:12 それはこうあるからです。『彼らには見るには見るが知ることはなく、聞くには聞くが悟ることはない。彼らが立ち返って赦されることのないように。』

4:13 そして、彼らにこう言われた。「このたとえが分からないのですか。そんなことで、どうしてすべてのたとえが理解できるのでしょうか。」

私たち人は本来、たとえイエシュアの弟子たちのように直接見聞きしたとしても、自分の力で神を知る事、その御心、ご計画を理解、把握することはできません。それには神から「聞く耳」が与えられる必要があるのです。またそれは「神の国の奥義」とも言い換えられています。この「奥義」のことをヘブル語でソード(סוד)と言いますが、これは本来「内緒の相談、秘密の会議」を意味する言葉です。

【新改訳 2017】創世記

49:5 シメオンとレビとは兄弟、彼らの剣は暴虐の武器。

49:6 わがたましいよ、彼らの密議に加わるな。わが栄光よ、彼らの集いに連なるな。彼らは怒りに任せて人を殺し、思いのままに牛の足の筋を切った。

これはヤコブすなわちイスラエルが自分の息子であるシメオンとレビに語った預言の一節です。ここで「密議」と訳されているのが聖書で最初のソードです。そしてそれは「怒りに任せて人を殺し、思いのままに牛の足の筋を切」るような「暴虐」を行うための「集い」であったと語られています。つまり「神の国の奥義」とはなんと、殺し、奪うことを指し示したものであると考えられます。では神は一体誰を殺し、また奪うのでしょうか。それは 4:12 の引用箇所であるイザヤ書 6:9~13 に指し示されている存在であると考えられます。

【新改訳 2017】イザヤ書

6:9 すると主は言われた。「行って、この民に告げよ。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな』と。

6:10 この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を固く閉ざせ。彼らはその目で見ること、耳で聞くことも、心で悟ることも、立ち返って癒やされることもないように。」

6:11 私が「主よ、いつまでですか」と言うと、主は言われた。「町々が荒れ果てて住む者がなく、家々にも人がいなくなり、土地も荒れ果てて荒地となる。

6:12 【主】が人を遠くに移し、この地に見捨てられた場所が増えるまで。

6:13 そこには、なお十分の一が残るが、それさえも焼き払われる。しかし、切り倒されたテレピンや榎の木のように、それらの間に切り株が残る。この切り株こそ、聖なる裔。」

これは預言者イザヤに告げられた、イスラエルの民に対する預言です。神はご自分の選びの民である彼らに対して、確かにこのような暴虐の限りを尽くされることを宣告しておられます。神は確かにご自分の所有の民、神の国の民として、アブラハムの子孫であるイスラエルの民をお選びになりました。しかし神はなんとこの民を守るどころか逆に殺すというご計画をお持ちだと言うのです。これはイスラエルの民、ユダヤ人たちにとっては理解し難い事実です。このようにイエシュアのみことば、すなわち神のご計画をイスラエルの民が理解できない様子が、冒頭の状況説明として記されていた「イエスは湖で、舟に乗って腰を下ろされた。群衆はみな、湖の近くの陸地にいた。」という湖と陸地、交わることのない隔たりのある様子にも、見事に表されていたと考えられます。

しかしこのイザヤ書6章の預言には続きがあり、イエシュアが引用されたのはこの6:9~10のみですが、この後6:11でイザヤの「主よ、いつまでですか」という問いに対して神が「町々が荒れ果てて…【主】が人を遠くに移し、この地に見捨てられた場所が増えるまで。」と応えておられるように、神のイスラエルに対するこの暴虐には期間が設定されていることがわかります。そしてイスラエルの民は永遠に、完全に滅ぼし尽くされてしまうのではなく、「聖なる裔」が残されることが示されているのです。ここで「裔(すえ)」と訳されているのがなんと「種」「子孫」とも訳されたゼラなのです。文脈からしてこれが「4:20 良い地に蒔かれたもの」すなわち「みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちのこと」であることは言うまでもありません。つまりイエシュアはこの「種蒔きのたとえ」の「種」を、イザヤ書のこの預言に示された「聖なる裔」と結びつけて捉え、読み取らなければならないことを暗示しておられたと考えられます。

このように、イエシュアが語られたこの「種蒔きのたとえ」は、聖書に記された神のご計画の全体を表したものであり、さらに「神の国の奥義」として、イスラエルの民に対する神のご計画を指し示したものであると考えられます。そしてイエシュアはこの捉え方、この視点なくして「4:13 …どうしてすべてのたとえが理解できるでしょうか。」と言っておられると思われます。ですからイエシュアの話されたたとえはすべて「神の国」の、イスラエルの民に対する神のご計画を表したものであると読み取らなければならないと思われます。そしてその成就と完成に目を留め、待ち望みつつ今を生きる者とさせていただきます。聖霊の助けがありますように。